



〈 社会人の窓 23 〉

ウィーンの水事情

石田 裕子

2023年8月21-25日にウィーンで開催された The International Association for Hydro-Environment Engineering and Research (IAHR、国際水文環境工学会)の第40回世界会議に参加し、研究発表してきました。発表タイトルは、「Restoration of Yodogawa Riverside Park through collaboration between citizens and government (行政と市民の連携による淀川河川公園の環境再生事業)」で、これまで私どもが寝屋川市内の淀川・点野地区に関わってきた行政と市民の協働による環境整備と、当研究室を修了した大学院生の研究成果である整備後の点野ワンド群での洪水流れ解析の紹介でした。細かい研究内容につきましては、ここでは省略しまして、アフターコロナ(ウィズコロナ)のウィーンの様子をお伝えしたいと思います。

この夏は日本全国、関西においても猛暑、酷暑と言われる日が続きました。ウィーンも大阪ほどではありませんでしたが、連日32~35℃(そのころ大阪では37℃)で、毎日ウィーン市1区の猛暑警報がスマートフォンに届きました。本来涼しいはずのヨーロッパで、地下鉄や会場の国際会議場もあまり冷房が効いておらず、毎日汗だくになっていました。そんな中、旧市街の路上カフェは大人気で、たくさんの薄着の観光客が真夏のウィーンを楽しんでいました。路上カフェではミストが設置されていましたが、ミストの粒が大きく、直接当たるとびしょ濡れになるほどでした。そんなところでも、日本の繊細な技術力を感じました。

ウィーンでは脱プラスチックが進んでいて、カフェのストローはもちろん紙製、スーパーやお土産屋さんのレジ袋は有料で、多くの方はエコバッグを利用していました。また、売られているミネラルウォーターのペットボトルは、100%リサイクルプラスチックと書いてありました。学会会場で提供される水は、ガラス瓶に入っており、栓を開けた状態でもらいました。余った場合には、マイボトルに移し替えるシステムです。国際会議では、いろんなグッズをお土産にもらうのが一般的ですが、この時は

ガラス製のマイボトルで、割らないかヒヤヒヤしました。

ウィーンの水事情ですが、水道水源はアルプス山脈からの湧水だそうです。ホテルの部屋や学会会場の手洗い場などに、必ず「この水は飲めます」と書いてありました。最近ではアジアの国際学会に行くことが多かったのですが、日本と同じように水道水が飲めることは新鮮でした。旧市街の至るところで、水飲み場があり、多くの人たちがマイボトルに水を汲んでいました。日本と変わらないくらい暑かったウィーンですが、さすがに湧水から来る飲み水はとても冷えていました。ところで、ヨーロッパに行き慣れた人には当たり前かもしれませんが、ウィーンに着いた初日、購入したミネラルウォーターを一口飲んで、硬水であることに気づきました。水道水ももちろん硬水です。味がどうというよりも、どうにも体に合わず、滞在中ずっと調子を悪くしていました。スーパーやコンビニのようなお店をいろいろ回りましたが、売っている水はすべて硬水で、軟水が恋しかったことだけがウィーン滞在中の残念な思い出です。

コロナ対策ですが、建物の入り口やトイレなどにアルコール消毒は置いていましたが、マスクをつけている人はほとんどいませんでした。私も滞在中はつけていませんでしたが、コロナに感染しなかったのも、現地ではもう収束していたのかもしれない。

学会のエクスカージョンではドナウ川の自然再生事業の見学をすることができました。その話は、また次回にさせていただきたいと思います。



街なかにある水汲み場。アルプスからの湧水です。

(淀川愛好会総務、摂南大学理工学部都市環境工学科教授)

イベント報告

第1回バスツアー 淀川三川合流域～巨椋池～伏見港

6月25日(日)に2023年度近畿建設協会地域づくり・街づくり支援事業 近畿圏における舟運文化の発掘とその伝承ネットワークづくり第1回バスツアーが水辺に学ぶネットワークの主催で開催されました。近畿各地には、舟運の文化を伝える資料や史跡が数多く残されており、今回のツアーは、その第一弾として、淀川周辺の代表的な渡しの上流部にあたる狐の渡し跡をはじめ、桂川下流部にあった草津湊魚市場跡、巨椋池流域模型ビオトープがある宇治川オープンラボラトリー、巨椋池漁業の拠点であった東一口(ひがしいもあらい)、木津川の渡し跡に架けられた上津屋橋、宇治川ラインの拠点部に位置する天ヶ瀬ダム、淀川舟運の上流端にあたる伏見港をバスで巡り、参加者は27人でした。(K・T)

PLP会館にて水辺の仲間と意見交換するための、交流会を行いました。午前実施した、水辺活動についての感想や、「水辺のたからもの」という、水辺の中で何が一番素晴しかったか、グループで話し合い班ごとに発表していました。子どもならではの保護者を驚かせるような意見も多く出て、知見を深める有意義な時間となりました。(K・T)

開会式



PLP会館の様子



伏見港・三栖閘門

近畿「子どもの水辺」交流会 in大阪 2023

8月20日(日)大阪市都島区にある大阪ふれあいの水辺にて、近畿「子どもの水辺」交流会in大阪 2023が開催されました。今回は、10時から午前の部では、生きもの観察・水質調査・E ボート乗船・砂地での地形形成実験などの水辺活動を行いました。猛暑での開催でしたが、子どもたちや保護者ら約100名の参加があり、子どもたちは元気にはしゃぎ回っており、とても楽しそうでした。午後の部では、

淀川まるごと体験会 in点野

9月10日(日)に淀川点野で、淀川まるごと体験会が開催されました。今回は午前9時から12時までで開催しました。約20人の親子が参加し、Eポートやカヌー、どんぐり工作などを行いました。また、防災の意識を高めるために、破堤実験モデルや防災関連のパネルが展示されており、冠水道路歩行体験もすることができました。暑い中の開催でしたが、子どもたちはそんなことを感じさせないくらい元気に活動していました。(K・T)



カヌーを楽しむ参加者

京の川の恵みを活かすフォーラム・アユの食味会

日時：2023年10月22日(日)・10月29日(日)
場所：京都大学 防災研究所宇治川オープンラボラトリー
内容：1日目：活動報告会
2日目：食味体験会
主催：京の川の恵みを活かす会
参加費：第1部は無料、第2部は3,000円
問い合わせ先：活かす会事務局
ikasukai.all@gmail.com



アクセスマップ

今後のイベント案内

天若湖アートプロジェクト 2023

「あかりがつなぐ記憶」

日時：2023年11月4日(土)・11月5日(日)
場所：日吉ダム(天若湖)周辺
内容：水没家屋の湖面にソーラーライトを点灯
主催：天若湖アートプロジェクト実行委員会
参加費：無料
参加申込：不要
連絡先：淀川愛好会事務局



茨田イチョウまつり

日時：2023年11月19日(日)仮
場所：茨田樋遺跡水辺公園
参加費：無料
主催：茨田イチョウまつり実行委員会
支援：国土交通省淀川河川事務所
申し込み：不要
問い合わせ先：淀川管内河川レンジャー事務局



アクセスマップ

クリーンリバー寝屋川作戦

日時：2023年11月26日(日)
場所：寝屋川せせらぎ公園・幸町公園

〈 学生の窓 23 〉

卒業研究完遂に向けて

緒方 秀飛

僕たちが生態環境学研究室として本格的に始動して、半年が経とうとしています。前期の間は過密な講義内容や、研究に不慣れであったことから研究室での活動は思うようにできませんでした。しかし体を使う現地調査はがむしゃらにこなしてきました。

ぼくは木津川高水敷たまりの水生生物群集について研究しています。6月、10月、(前年度2月)現地調査を行います。調査地点は2カ所あり、伝統的な河川工法である中聖牛を設置している玉水橋付近と、設置していない山城大橋付近です。2020年度には洪水攪乱による変化も調査していましたが、過去2年間で洪水による冠水は確認されませんでした。しかし今年は6月時点ですでに冠水が確認され、研究としては喜ばしい限りです。後期では時間が多く確保できるため、採取したサンプルの開封や他メンバーの研究項目の手助けなど、より一層研究に励みたいと存じます。



伝統河川工法である中聖牛(写真は宇治川オープンラボラトリーに置いてあるもの)

(摂南大学理工学部都市環境工学科石田ゼミ4年生)

お見舞い

今夏も全国のあちこちで 相次いでいます。
被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

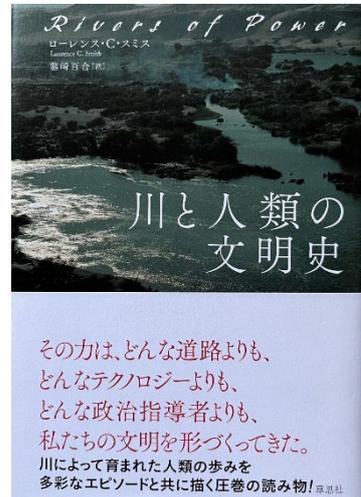
書籍紹介

川と人類の文明史

著者：ローレンス・C・スミス 訳者：藤崎百合

出版社：草思社 発行：2022年2月

定価：3200円＋税



「書籍内容」

昔々、雨が降り注いで、この大地を形づくった。しかも何百年にもわたり、流れる水は山々を削り、土砂を運んだ。川によって大地は海へと延び、堆積した豊かな土砂によって広い平野ができた。人間や生きものは、川(水)がなくては生きていけない。そのためにも人間が川を利用する方法を学び、土地によっ

て異なり、また時代とともに変化してきた。そして、「川が人類にもたらしたものは何か。」本当に読み応えある447ページと厚い素晴らしい本です。(O. Y)

編集後記

地球温暖化による暑い日が長く続くなか、近畿「子どもの水辺」交流会 in 大阪が開催されました。

そして開催報告の中で様々な意見があり、夏の開催を止めるべきなどの意見がありました。また子どもからは楽しかったという感想もいただきました。

大人の視点では、暑いからやめるのではなく、この自然をどう考え対応すべきかを考えなければならないように思います。

リスクがあるが、季節を通して川遊びができるように、川の整備が必要な時期に来ているように思えるのです。大人も子ども同様にさまざまな経験をさせていただき、素晴らしい近畿「子どもの水辺」交流会 in 大阪の開催でありました。

編集長 岡崎善久(岡崎善久建築設計事務所)